

# 『ヨハネの黙示録』解釈

～避難計画書～



N

## 3つの災い

---

本レポートは「3つの災い」が避けられないものとして解釈する。

災いは**千年間**続く。

その災害ゆえに、あの世の住人はこれまで通りに暮らして行けなくなる。

『ヨハネの黙示録』が伝えるのは、迫り来る災害から離れる為の、大規模な避難計画だったのだ！

---

「第一のわざわいは、過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。」（第九章）

「第二のわざわいは、過ぎ去った。見よ、第三のわざわいがすぐに来る。」（第十一章）

↓

「千年」

↓

『・・・もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである』（第二十一章）

<避難計画書の目的>

「あの世」で起ころうとしている災害とその対応策を伝えることで、諸国民が必要以上に動揺しないよう、神は配慮された。

<結論>

- ・なぜ「あの世」で災害が起こるのか。
- ・なぜ「赤い龍」に隠しながら避難計画を進めなければならないのか。
- ・避難計画のおおまかな流れ。

→ 諸国/諸地域/諸宗教の仲間グループのうち、幾人かはこれらの事を知っておき、落ち着いて仲間達を励ますことができるよう、心の準備をしておくことが必要。

<計画の流れ>

現在 避難準備中

↓

「移動要塞」に乗り込み、災害を避けて暮らす

↓

千年後 帰還、大粛正

↓

新しい世界建設

<解釈>

次ページから>>

## 1.はじめに

---

私は、「災い」の正体を独自に定める。

- ・ 第一の災い： 1期目の[暗黒星雲](#)
- ・ 第二の災い： 2期目の暗黒星雲
- ・ 第三の災い： 暗黒星雲が集まって極大期に入る

「ヨハネの黙示録」が災害からの「避難計画」を伝える為のものと捉え、その視点から解釈を試みる。

---

※ [用語集](#)は巻末に。

原文の引用は、「新約聖書 1954年改訳」（日本聖書協会, 1984, p.386-409）。←ネット上にもあると思います。

## 2. 黙示の構成

---

- ・ 7つの教会へ：  
導入部。あの世からのメッセージを全能者から7つの星の御使いへ、御使いから人間へ。
- ・ 7つの封印：  
秘められてきた計画が、小羊を通じて人間に明かされていく。
- ・ 3つの災い：  
カモフラージュしつつ、この世でもあの世でも暗黒星雲による災害があることを伝える。
- ・ 龍と獣の悪さ劇場：  
敵をキャラ化してイメージ表現。
- ・ 7つの災害：  
契約により、この世の獣を天の権威で裁く展開に。
- ・ 大淫婦への裁き：  
黙示録における最大の盛り上がり。実は、第三の災いの正体、すなわち暗黒星雲極大期の発生が明かされている。
- ・ その後の千年の期間：  
小羊が獲得したそれぞれの「移動要塞」での避難生活。帰還後、サタン（悪魔）の最期。
- ・ 「人災と災害」の終焉と新世界：  
死者の裁きが行われ、災いが過ぎ去る。「移動要塞」と新世界の様子。



### 3. 解釈の資料

---

☆黙示録解釈の新情報は、こちらのホームページに載せています☆

→「魂」＝「エネルギー意識体」の世界 <http://secca.ninpou.jp/>

#### <第一章～第三章>

イエス・キリストがヨハネに御使いを遣わして見せた黙示。

人の子のようなもの：

「御使い」＝”**自立型エネルギー意識体**”。あの世の住人は、人型をしたエネルギーに満ちた存在で、ヨハネの目から見てうまく認識できないほど輝いて見えている。また、この世にない色彩は「白化け」していると思われる。「髪は——羊毛に似て真白い」とあるが、実際には”虹色”のような多種多様な色彩なのだろう。

7つの教会へ：

諸国民を7つのタイプあるいはグループに分けて、魂の成長のための課題を語り励ましている。語っているのは、各宗教や各グループの先人先輩たちを演じるあの世の俳優またはCG。

「7」という数は、関連事項が複数あることを示すのだと思う。関連事項のまとまりを表す。

#### <第四章>

**聖所（舞台セット）**、神の御座から、厳かに未来の出来事が語られていく・・・

#### <第五章>

「巻物——7つの封印で封じてあった」：

黙示録に封印されている未来の情報が、**あの世の住人にも隠されている**ことを意味している。

※よって、この黙示の映像は、ご本人が出演しているのではなく**俳優やCGが演じている**と言い切れる。

小羊：

「7つの角7つの目」は、1人ではなく複数人の象徴であることを示す。「小」は、この世に来た姿を指すからだろう。この世に来る時、エネルギーを一様に抑えられ小さくなっている意味か。

また、「**羊**」は、**非暴力または敵と直接交戦できない状況**を表す。（この背景として、**先住者は新人**の反乱を恐れて、戦争による解決を避けようとしてきた経緯がある。参照：**新人と先住**

者の確執)「小羊」は、この世に来たときには「獣」に対して戦闘による問題解決ができない設定にされている者たちだろう。この解釈では、それぞれの「移動要塞」の長かその代理のこととなる。

新しい歌：

小羊と、その仲間たちから発せられる新しい主張のこと。

ほふられた小羊：

イエス・キリスト。この黙示は、世界のロングセラーとなる新約聖書に収められ、故に誰でも手にとって読めることとなる。国や宗教の違いが障壁にならず、また記述を変えられることなく、できる限り多くの民が黙示に触れられるようにすることが、神とその御使いたちの望みなのである。

## <第六章>

7つの封印1～6：

登場キャラの紹介と、この世で起こる災害の概要。

封印1→白い馬に乗って登場：暗黒星雲と戦う者

封印2→赤い馬                        ：赤い龍と同義

封印3→黒い馬                        ：獣1（1期目の暗黒星雲）

封印4→青白い馬                      ：獣2（2期目の暗黒星雲）

封印5→待たされている人々の靈魂：避難民たち

一人一人に与えられる「白い衣」は、避難準備が整った者達を白く色分けしたということ。

封印6→大地震、小羊の怒りの日

## <第七章>

生ける神の印を持つ御使いが、日の出る方向から上ってくる。災害（封印6の大地震か？）を「4人の御使い」に待ってもらっている間に、神の印を受け白い衣を着る者達が14万4千人選ばれる。

（※ 待ってもらっているのは、あの世で論争が起こっている間の、時間の有効利用だろう。）

（※ ここに限らず、数字はこの世の数字かあの世の数字かは不明。）

ここで選ばれた14万4千人は、とくに信頼される避難民たちであり、「昼も夜も聖所で神に仕えている」という表現から、「移動要塞」で重要なシステム管理の権限を任されるクルー達だと思われる。

「長老たちのひとりが、わたしにむかって言った——わたしは彼に答えた、『わたしの主よ、それはあなたがご存じです』。すると、彼はわたしに言った——」：

NGな気がするが、セリフは続く。

14万4千人の「牧者となる小羊（7人あるいは複数）」とは、各移動要塞の長またはその代理人ということ。

### <第八章>

封印7が解かれると「半時間ばかり天に静けさがあった」：

時間の経過があるということだろうか。・・・思ったが、ここだけなので、演技の段取りを練り直してるだけかもしれない。

そして、御使い達に7つのラッパが与えられるのだが、第一章で「ラッパのような大きな声」という表現があるので、声による合図に代わって、ここからラッパという小道具を使うことにした。

「聖徒の祈り、香の煙」→ これらを投げつけると災害の映像が始まる：

心正しい者達の祈りが未来を見せてくれるという演出によって、視聴者を映像に注目させた。

多くの雷鳴と、もろもろの声と、稲妻と、地震 と・・・劇的で恐ろしげな演出で、いよいよ「わざわい」の映像が始まる・・・

### 「第一のわざわい」に関する映像>>

1～5のラッパ：

1期目の暗黒星雲に関わる、災害や事故、そして中世の戦争。

第五のラッパのシーンが重要：

「底知れぬ所の穴」とは、あの世で天国の底、地獄の分かれ目に空いた穴。地獄から暗黒星雲の災害が上ってくる。あの世で災害が起こると、この世でも何らかの事象が起こる。煙が立ちのぼり、その中から出てくるいなごが本当にいなごの大きさなら、暗黒星雲極大期の兆候がすでに現れているのだと思う。映像には、この世の中世の戦争のシーンも混じっている。甲冑を全身に纏った兵士や攻城兵器の描写か。

「中世」の暗黒期は暗黒星雲の見えない影響が作用し、あの世の住人から見ても「あの時代は酷い・・・」という時代だった。

のラッパの事象は時系列順に並んでいないのだと思う。 重要なシーンほど、後に並ぶのかも。

### <<「第一のわざわいは過ぎ去った」



## 「第二のわざわい」に関する映像>>

6のラッパ： 2期目の暗黒星雲がもたらすこの世の事件。

「大ユウフラテ川」はこの世の大きな川のことだろう。「4人の御使い」が人間の3分の1を殺すために解き放たれる。また「その時」はあの世では確定している。

火と煙と硫黄： 火薬を使った近代的な武器や戦車によって、多くの人々が殺される。

↑ 天安門事件のようにも思える。しかし、騎兵が**2億**というのは考えられない数の表現だ。「4人の御使い」は第6の封印の時にも登場した。同じ所で殺戮と災害が起こるといことだろうか。

<第十章>で、この世に御使いが降りてきて、開かれた巻物を手に、あの世の御使い達と議論をする。巻物は封印されていないし、議論の言葉はヨハネに理解できるが、内容を封印するように注意される。そして巻物は人間であるヨハネに渡される。

<第十一章>は、「地震で7千人が死に・・・」の記述から1995年に日本で起こった阪神淡路大震災のこととする。この年、この世の暗黒星雲（カルト）がアジアで活動を活性化していた。

## <<「第二のわざわいは、過ぎ去った」

## 「第三のわざわい」に関する映像>>

7のラッパ： 暗黒星雲極大期に関わる災害。

「すぐに来る」と言いながら、「わざわい」のシーンはずっとカモフラージュされたままとなる。

「この世の国はわれらの主とそのキリストとの国となった。——」：

この世が「移動要塞」に移管完了し、赤い龍が手を出せなくなったということ。

「——地を滅ぼす者どもを滅ぼして下さる時がきました」：

「小羊」のイメージで表されるように、この世の者達の多くは、「獣」の問題を戦闘で解決できない状況にされていて、あの世の権威で地を救うしかないのである。

→天の聖所から**契約の箱**が登場：

「天の聖所から」出てきたことから、**時が来れば獣をあの世の権威で滅ぼすという契約か。**

→**稲妻と、諸々の声と、雷鳴と、地震と** が起こり、**大粒の雹** が降る：

わざわざの映像が始まったのと同じような、劇的で恐ろしげな演出で、「第三のわざわざ」がどのようなものか分からないまま、映像が切り替わってしまう。

<< 「第三のわざわざ」は、**終わりを告げられないままスルーされる**・・・

## <第十二章>

この章から、**イメージ化されたキャラクター**が多用される。

※これらの話の背景には、**新人と先住者の確執**など長い話がある。だが、映像だけでは細かい事情は伝えられないので、「**敵のイメージ**」を伝えることにしたと思われる。

太陽を着る女：

日本を擬人化した表現。俳優かCG。

赤い龍、龍：

敵キャラ。映像で「敵」と分かるように、**赤い**色分けで悪そうな絵柄なのだろう。「全世界を惑わす年を経たヘビ」とも。非常にずる賢く、長生きな（あの世で「長生き」は少なくとも2億歳。先住者。）印象を受ける。 ※腐敗した者を悪仲間に取り込み運命共同体となり、「大粛正」を逃れる工作をしてきた。

「ひとりの女が——」：

※「男の子」は、第二次世界大戦の時、日本に生まれていた、あの世の未来の反乱軍の代表者のこと。彼が狙われているのは、「赤い龍」が未来のその反乱を恐れてきた為。男の子は15歳で戦死し、その生で最上**階層**に入ることが決まった。

（「男の子」が、あの世にいる「赤い龍」に狙われているというシーンがある故に、あの世には「**未来予知装置**」があり未来を変えることができるにも関わらず、黙示録は今の世界/時間軸に非常に近い預言であることが分かる。）

「さて、天では戦いが起こった。——」：

”ミカエル”は、あの世の正規軍の指揮官で”最も活躍する者”辺りのことではなかろうか。それに当たる者と御使い達が、サタンと呼ばれ全世界を惑わしてきた邪悪で巨大な龍とその使い達と、おそらく議論で戦う。その結果、大粛正で工作をしてきたことがバレ、龍は立場がまずくなり、計画の罠にはまる。

「——しかし、地と海よ、おまえたちはわざわざである。悪魔が——おまえたちのところに下ってきた——」：

※あの世では、問題の解決に「**新人達は新しい世界に行く**」ことで話がつく。（新人側に味方することになった先住者の一部も共に「あの世」を出立することになるだろう。）だがそれは

、実は「災害からの避難準備」なので、やはり隠して事を進める必要がある。

よってその間、この世の者達は囧（おとり）にされ、龍に狙われる・・・

※先住者が嫌がらせの為に、人間に生まれ変わってこの世に来るとは到底思えない。「地に投げ落とされた」というのは、この世に執着するようになる事の比喻だと思われる。あの世からこの世を覗き見して介入してきたのだろう。しかし、あの世の新人側も警戒している。よって、介入には悪意の強い人間を手下に使うことになる。それが主に「獣」になるのだと思う。

「女の残りの子らに——戦いをいどむ——海の砂の上に立った。」：

※第二次世界大戦の時、日本には反乱軍のメンバーが多く来ていた。その後、今は色んな国に生まれ変わっているはず。

龍は彼らに怒りを向けるが、子らは群衆に紛れている。

### <第十三章>

「赤い龍」、「獣1」、「獣2」。この世に悪さを働く敵キャラの紹介シーン。あの世にいる龍が、この世に来ている獣に加勢する。龍が親玉で、獣はその手下の立場。

「角が10本頭が7つ」とあるので、獣達は複数の国にいるということだろう。獣の悪事の内容は、カルト国家/組織が行なっていることの極端な比喻。

「獣の刻印」とは、映像中に出ているテロップ。手や額にまで（映像上あちこちに）刻印が表示されていることから、群衆の中に獣も紛れ込んでいるということ。「刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした」というのも極端な比喻だろう。そういえば、最近の若者は安定した職に就くのが難しくなっている。

刻印であり人間を指す「666」とは？ただのテロップではなく、意味があるのだろうか。この解釈では、ここはカルト集団の悪事を「イメージ化したキャラ」で極端に表現しているシーンであることから、「666」を「テロップで獣を示すためのマーク」の意味とする。

「思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。」とあるが、ここがCGか特撮、または着ぐるみキャラを多用したユーモラスなシーンだと気付いてしまえば、具体性のある数字や誰かを名指しするシーンではないと分かる。

獣：

敵キャラ。エネルギー宇宙から回収された塵からエネルギー体を生成する技術で復活した暗黒星雲。もともと集合体になりたがる性質を持つ。1期目と2期目の暗黒星雲がいる。1期目はもうほとんどが地獄に収まっている。この世に来るとカルトの性質になる。

### <第十四章>

「小羊がシオンの山に立っていた——」：

小羊が14万4千人を引き連れ、新しい主張をもって演説する。 ※小羊達はこれまで先住者との確執の為、先住者に対して主張する機会まで奪われてきた。彼らはここで初めて正統に、意見を主張できることになる。

「この歌は——のほかは、だれも学ぶことができなかった」：

小羊達の演説する内容が、「新しい歌」で表現される。その歌を他に誰も歌えないのは、14万4千人が選ばれた者達ということ。

14万4千人、初穂：

何度か出ているが、「小羊の行く所へは、どこへでもついて行く」という所からも規律ある行動を思わせる。 ※「移動要塞」は編成を組んで進む必要がある。やはり彼らは「移動要塞」におけるシステム権限を任される最初の者達と思われる。

御使いの福音「——神のさばきの時がきた——」：

ここから<第十二章>の前の続きか。

第二の御使い「——大いなるバビロンは倒れた」：

この詳細は、後で語られる。

第三の御使い「獣の刻印を受ける者は——聖徒の忍耐がある」。：

心正しい者達の忍耐が報われ、獣を裁けるようになる。

天からの声「書きしるせ、『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである』」御霊も言う、「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」。：

幸いであるというが、不安になるセリフでもある・・・

※映像中のセリフは、出演している俳優声優にも未来の情報がはっきりそれと分からないように、かなり抽象的な内容になっている。なので、あまり言葉通りに受け取らないほうがいいだろう。

~~——ここで、食糧危機が起こる。~~

~~——そして、「火を支配する権威を持っている者」が命じることから、「ぶどうの酒がね」は石油に関わる問題だろうか。~~

獣への裁きである「7つの災害」は、過去のもの、現在進行中のもの、数年かけて起こるもの、さらに現在（2012年4月）より未来のものもあると思われる。

獣は一時、「王の権威」（世界や国を操る影響力）を持つが、その間にもこれらの災害のいくつかは進行中。やはり時系列順に並んでいるのではなく、重要なシーンほど後にくる。

こと。黙示録では、この世の災害の話の中に紛れ込ませて説明してある。7つの災害がやたら大掛かりな演出で始まるのは、あの世の方で起こる災害も「裁き」に入れているからだろう。

#### <第十五章～>

聖所の舞台から、最後の7つの災害が出てくる。これらの災害は、全能の神の激しい怒りをもって始まる。

#### <第十六章～第十八章>

「第一～第五の者の鉢」：

7つの災害は、この世の「獣2（カルト）」を弱めたり、裁いたり、滅ぼす為のものである。

※「獣の国」とあるので、獣の国（獣に支配された国）にいる心正しい人も巻き添えになるのでは・・・ この世では奇跡が起きなければ、心正しい人を巻き添えにしない災害など不可能。「今から後、主によって死ぬ死人はさいわいである」と天から声が響いた後なので、心正しい者が天に召されると「移動要塞」に入り、あの世の極大期の災害（第三のわざわい）から守られるのだろうが・・・ 福音とか・・・やはり怖いよ黙示録・・・

「第6の者が——」：

ここでまた「大ユウフラテ川」、大きな川が出てくる。その大きな川が涸れる。龍と獣と偽予言者が仕組んで、全世界を巻き込み戦争を起こそうとする。この段階では「この世」は「移動要塞」にほとんど移管されていて、龍は直接介入できないので、「かえるのような悪霊の霊」を使うようだ。「全能なる神の大いなる日」というので、「その日」はあの世では決まっている。ここは、全世界の政治家/統治者は要注意。

「第7の者が——」：

「事はすでに成った」と言う声がすると、稲妻と、諸々の声と、雷鳴とが起こり、地震が起こる。この時は、前代未聞の激しい地震だという。地震で津波が起こり、さらに大粒の雹が降る。

これは、<第十一章>の第7のラッパの終わりの演出と同じで、「激しい地震であったこと」が追加シーンになる。ここでも「第三のわざわい」は終わりが告げられていない。

おそらくこの災害で、この世に来ていた獣が大勢あの世（の地獄）に行き、この世は「移動要塞」内に完全に移る。そして「移動要塞」があつた世から出立する準備がすべて整う。



## <第十七章>

ここで「大淫婦＝大いなるバビロン」に対する裁きのシーンに舞台が変わる。

この章と<第十八章>で語られるのは、多くの人が思いつくと思うが、現在の**世界的な金融危機（信用不安）** 関連のことだろう。ただ、それだけでは大げさ過ぎる。

その大げさな盛り上がりのシーンのどさくさに紛れて、「獣」の正体を簡単に説明してある。

→「あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて、ついには滅びにいたるもの」：

この解釈では、これはまさに「暗黒星雲極大期」そのものである。

「底知れぬ所」とは地獄の階層のこと。そこに集まった暗黒星雲が極大期に入り、エネルギー放出を始め、他のエネルギー体を攻撃する。**その悪影響は、目に見えるものと見えないものがあり、そのため「未来予知装置」にも容易に捉えられなかった。** エネルギーを放出している間、大きなエネルギーを持つ為、天国の階層まで上っていけるようになる。エネルギーが尽きると消滅していくのだが、その災害がいつまで続くか、はっきりとは分からない。黙示録では千年後も続いている。

擬人化されたアメリカが赤い獣に乗っているのは、金融界をキャラクター化した表現だろう。「姦淫」とは、「実体のないお金を膨らませる錬金術」のことか。獣の「7つの頭」は獣のいる国のこと。「7つ」は複数を意味するかもしれない。獣のいる「7つ」の国のうち1国は、獣が完全に支配している。

「——10の角は、10人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時だけ王としての権威を受ける。——」：

アメリカ金融界とつながって富を得ていた10の有力者や組織が、獣に「自分たちの力と権威を与え」、一時だけ（この世の時間感覚では**数年**か）獣とつるんで自分のいる国や世界の政治を動かす影響力を持つ。**政治に影響力を持つ**ことで、金融危機以降の損失や地位低下を免れようとする。

「——かの女は、地の王たちを支配する大いなる都のこと」：

「大淫婦」はアメリカの国自体ではなく、**都市のこと**だと分かる。

## <第十八章>

この章は、ずっと大いなるバビロンに対する激しい裁きのシーンだが・・・。人間の都市に対して、あの世の住人達がここまでしないだろう。アメリカはバビロンを抱えているため衰退し、災害なども起きるのかもしれないが、御使い達が自らの手で打ち倒すような表現といい、この世の都市に対してあり得ない。中国や北朝鮮に対してさえ、こんな扱いはしていないのだ。やはり、**あの世で起こる「第三のわざわい」を、この世の出来事にカモフラージュして掛けているのだ**

ろう。

大いなるバビロンが「一瞬にして無に帰してしまう」というセリフが3度も繰り返されている。「第三のわざわい」すなわち2期分の暗黒星雲が引き起こす災害は、あの世の時間感覚で一瞬一日のうちに「あの世の大いなるバビロン」を襲うのだろう。

<第十七章>と<第十八章>に、あの世で未来に起きる災害のイメージを紛れ込ませてあった。

すなわち、獣はあの世に戻ると極大期に入り「第三のわざわい」となる。あの世に取り残された赤い龍とその使いたちは、その災害に遭うことになってしまう。

☆さらにもう一人の真犯人のイメージも混ざっている。詳しくは、こちらのホームページで→  
<http://secca.ninpou.jp/18.html>

<第十九章>

神への賛美と、小羊の「婚姻」の話題。この章は幕間であろう。

「小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をした」：

「婚姻」「花嫁」は黙示録では明らかにならない事情なのだが、先住者に対するカモフラージュである。「花嫁」すなわち「移動要塞」を小羊が得るということで、7人（あるいは複数）の小羊が各移動要塞の長となる。

「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」：

「移動要塞」で出立や着任を祝してパーティーがあるらしい。

「そのようなことをしてはいけない。——同じ僕仲間——」：

これは最後の章で。

「白い馬に乗っているかた——天の軍勢が——従った——口からでる剣」：

「口からでる剣」というのは、言論による戦いのCG表現。論戦なのに、なぜか馬に乗ってバトルを繰り広げる・・・ひょっとしたら、ここは、今時の漫画やアニメであるようなチャンバラのシーンかもしれない。派手にチャンバラを繰り広げながら、会話で相手を斬り伏せていく。なぜか鳥たちまで場面に加わるのだが、イメージ映像であるからあまり深く追求するまい・・・

天が認める正しい者の格好いい活劇シーン☆

## <第二十章>

ここからラストまでずっと、あの世とエネルギー宇宙が舞台となる。

「——かの年を経たへびを捕らえて千年の間つなぎおき、——その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。」：

普段あの世は閉ざされた世界で、勝手に出てこられない。「へびを捕らえてつなぐ」というのはそういう意味だろう。「その上に封印をし——」というのは、世界の外側からさらに強固な隔離措置を施すのかも……。そして千年経つと、「移動要塞」の住人達は「大粛正」を行うか検討するため、あの世に戻ってくる約束になっていた。

シーンが変わり、端折られているが、ここで「移動要塞」は無事出立したのだろう。

裁判のシーン。

「首を切られた人々の霊」というのは、魂が死んで復活を遂げてなくとも、霊の状態で、裁判で証言できるようにしてあることかもしれない。過去の「大粛正」で赤い龍の謀略で身代わりに殺された者達が、復活できるようになる。

「また、獣をもその像をも拝まず——彼らは生き返って、キリストと共に千年の間、支配した」：

この世の管理がキリストのいる所、すなわち「移動要塞」に移管してあることが窺える。（キリストは先住者と新人に分けると新人。ちなみに、仏陀もムハンマドも。）

「（それ以外の死人は、千年の期間が終わるまで生き返らなかった。）これが第一の復活である」：

暗黒星雲に影響を受けやすい死人は、極大期が収束するまで、とりあえず千年待ってもらうことになるのかもしれない。

「第一の復活にあずかる者は——第二の死はなんの力もない。」：

獣と戦ったりその悪影響に打ち勝った者たちは、善良で悪に染まりにくい者と証明されたようなものなので、この先なんらかの事情で魂が死んでしまっても、復活できる決まりになるのだろう。

千年後・・・

この時には、「へび」とか「龍」とかでなく、「サタン」と書いている・・・姿が確認できないのかも。

「その数は、海の砂のように多い——」：

暗黒星雲極大期に入ったあの世では、色んなエネルギー体が攻撃を受ける。エネルギー体の一

部は暗黒星雲になってエネルギー放出を始め、それが済めばやがて塵に還っていくのだが、その塵に還りかけた極大期の名残が階層を上ってきて、帰還した「移動要塞」に迫ってくる。その時、「移動要塞」からの攻撃で、ようやく極大期は終わりを迎える——。赤い龍や獣の生き残りがいれば、彼らを裁くことができるようになる。

※極大期の影響の真っ只中にあって、パワーアップできるエネルギー体はまずいない。どれだけ凌げるかが勝負だろう。

「かずかずの書物が開かれたが——いのちの書」：

これは「新制大粛正」の場面だと思われる。先住者と新人の確執の中で、“粛正逃れ”や“身代わり殺人”だけでなく、「未来予知装置」すなわち未来の情報の悪用も問題になっていて、過去に遡って罪を問う必要が出てしまった。そのため「過去を知る装置」が必要であり、今はなくとも千年後にはあるのかもしれない。「いのちの書」は、過去の陰謀や重罪を見つけ出す装置で、罪のない者をリストアップできるようになるのだろう。ここで問題がある者は「火の池」に投げ込まれ「第二の死」になる。「第二の死」とは、永い間復活しないの意味。 ※基本的に、あの世に「永遠に続く[何か良くない状態]」はないとされている。だが、ここで言う「火の池」は「罪人が墮ちる本当の地獄」だと思う。

↑ この章で、あの世を出立してから千年間のことが映し出されていた。

<第二十一章>

「新制大粛正」の後、「新しい天と新しい地」に場面が移る。

この後、「移動要塞」のお披露目も控えている。

「——先のが、すでに過ぎ去ったからである。」：

これが、「第三のわざわい」が終わったということ。「第三のわざわい」は終始カモフラージュしたままだった。<<

「見よ。わたしはすべてのものを新たにする。」：

災害の跡を含めた新しい空間に、新しい世界を建設するということ。

「事はすでに成った。——」：

「第三のわざわい」が始まった時のセリフで、もう一度、<あの世が抱える2つの問題>の終わりを示している。

——わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終わりである。——」：

↑ そしてここで決め台詞。

「——天から下って来る——都の輝きは、高価な宝石のようで——都は方形——そこには夜がない——」：

この都、「移動要塞」は、極大期の災害から離れる目的で作られた。災害の危機に対応する為、常に誰かが起きていなければならないので夜がない。

(↑ 詳しくは、4.「聖都」解釈で)

「——入れる者は、小羊のいのちの書に名をしるされている者だけ」：

2つの問題が解決して、新しい地に着陸した後の「移動要塞」の姿なのだろう。そこを拠点に、新しい世界を建設していく。

## <第二十二章>

前章から、**聖所の舞台セット**がなくなっていることが指摘されていることと、

<第十九章>にも、ヨハネが御使いを礼拝する必要がないと告げられていることから、

→これらは「**階層制**」がなくなったことを意味するのだろう。



## 4. 「聖都」

<第二十一章>、<第二十二章>で登場する「聖都」は、災害対策が定まった後の「移動要塞の**模型**」であろう。**都の色と形、大通り、城壁、城壁の土台、門、灯り**についての記述がある。災害を乗り切るために必要な点から解釈する。

<必要な点4つ>

1. 危険空域から離脱する速さ
2. 都(居住区)の周りを隙間なく覆う仕組み
3. 暗黒星雲極大期の暗黒物質やエネルギーが侵入してきた際の、除塵等の仕組み
4. 危険が迫ったら、時間を稼ぐ為に攻撃(拡散砲!? 遠くに吹き飛ばすようなもの。)

1.  
小羊が手に入れる聖都は「天から下って来る」。つまり、飛べる。

古代ローマの単位で、  
1キュビト=0.444m  
1スタディオン(丁)=185m  
らしいので、  
**144キュビト=63.9m**  
**一万二千丁=2220km**

都は長さ、幅、高さが2220km。これはこの模型の大きさで、あの世の実物はまた大きさが異なるだろう。

この島のような大きな要塞が、災害の中から離脱できる速度が必要。黙示録の記述にあるのは、千年後の完成型かもしれない、今の技術でどれくらいの速さが出せるのだろうか。とにかく、移動要塞の機動性と速さが充分であるよう、建造を急ぐ箇所は決まっていこう。

2.  
**イナゴの大きさの暗黒星雲の欠片**が入ってこれないようにするには、居住区の外部を隙間なく覆う必要がある。極大期のエネルギーバーストを防いだり、受け流すためにも、やはり覆った方がいい。

よくSF小説等で、何も通さない透明なバリアみたいなものが登場するが、今のあの世には、そんな技術はないと思われる。あるならいいのだが、それがあつたら極大期災害なんて起こらないだろう... 少なくとも万能なものはなさそう。

そうすると、やはり物理的な障壁をつくるしかない。建造物で隙間なく居住区の外部を覆う。効果の高い素材、必要な壁の厚さなど分かればもっといいのだが。

ところで、

都はなぜ**方形**? →長さ、幅、高さ、それぞれがほぼ同じなのは、これが模型であることを暗に示している。「立方体のモザイク」ということ。都と大通りが「**すきとおったガラスのような純金で造られていた**」というのは、都の景観は目隠しされていて、モザイクがかかっているということ。

つまり、ヨハネが見た「都」は、災害対策を説明する為のプレゼンテーション用サンプル。『**簡易模型**』。その模型で、「城壁」と「城壁の土台」と「門」を強調した上で、大通りの川を見せ、都には「**水**」と「**水の流れ**」を使った**仕組み**があることを暗に示している。

3.

極大期の塵は、少しずつでも侵入して集まれば、災害となる。そのため、宇宙空間からの出入り口は除塵槽のようにしてあるのだろう。「門はそれぞれ**一つの真珠**」というのは、**球形**の除塵槽。「十二の門に十二の御使いがおり、十二部族の名が書いてある」のは、やはり**住居区につながる門**であるということ。この模型では、住居区は少なくとも12区画はある。都の外壁となる住居棟に、それぞれの門。それぞれに門番がいるのかも。

ヨハネの見た「移動要塞の模型」は、安全な広い地に降り立ち、門を開放している時の様子。「城壁」は**洗浄用プール**で、水を抜いてある。つまり、災害の間、144キュビト(63.9m)の高さの洗浄用プールに水を集めていて、「土台」に位置する底部区画と通路と出入り口の洗浄に使う。

「都の城壁には十二の土台があり、それには小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。」というのは、「土台」部分に「使徒」の出動ハッチがあるのかもしれない。

「都の城壁の土台は、さまざまな宝石で飾られていた。第一の土台は碧玉、第二はサファイヤ、第三はめのう、第四は緑玉、第五は縞めのう、第六は赤めのう、第七はかんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉石、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。」これは、この模型で十二ある住居棟の出入り口の底部区画に、水はけのいい素材をそれぞれ使っているということ。底部区画には乗り物(飛行機、宇宙船など)置き場もあり、除塵の際、水でざっと洗い流せるようになっている。

**水は、極大期の塵が持つエネルギーを抑えられるのだろう。**

※エネルギー体は、人間のように「常に呼吸をしていなければならない」ということはない。水中でも、とくに息苦しくならないのだと思う。

4.

極大期のもたらす災害は、目に見えるものと見えないものがある。だからいつの間にか、災害

が移動要塞に迫っている、ということもあり得る。そうなったら、何でも使って**危険空域を離脱**すべし！要塞に主砲や出動ハッチを設ける。救出/離脱の時間を稼ぎ、色んな危機に臨機応変に対応できる機器設備装備を備え置く。

<その他>

都の色と形：

「高い山の上から見ると、都は**透明な碧玉のような輝き**」なのは、浄化用プールの水の色であろう。近づくとも都は、**「すきとおったガラスのような純金」** でモザイク処理されている。

もともと私たちは広いエネルギー宇宙空間を漂っていた存在。安定を求めて地を作った。で、これから「神と小羊の怒り」に触れたあの世を離れ、再びエネルギー宇宙に戻ろうとしている。つまり、あの世にも「重力」のようなものがあったということだが、移動要塞内では、平面にこだわることはないかもしれない。空間を有効利用するために、そういう所から工夫できるといいかもしれない。

黙示録では、都の居住空間には「立方体のモザイク」がかかっている、都の大通りの一部以外、**内部構造は秘匿**されている。

灯り：

「小羊が都のあかり」というので、艦長室がある区画に灯り（エネルギー）の主な供給元があるのかも。都中に光が行き渡っている。

大通り：

**「すきとおったガラスのような純金」** の道なのは、やはり一部モザイクがかかっているから。「いのちの川」が大通りの中央を流れ、その両側に「いのちの木」がある。川を見せたのは、都が水の流れを利用している事を示すため。「十二種の実がなる木」を見せたのは、十分な実りがある豊かな住処であることを示すため。

※ あの世の新人には、古代文明の遺跡からギリシャ・ローマはもちろん、近代・現代まで、この世に来ていた各時代の建築技術者たちがいて、あの世の技術を駆使して「移動要塞」を作ってくれているはずだ☆ 自分で作りたいという人も、都や自宅なら融通利くかもしれない♪ 新人は、先住者の「先にいた者特権」にさんざん嫌な思いしてきた者ばかりなので、後から来た者が不利益を被るようなことはまずないだろう。

※ 極大期に入った暗黒星雲は、エネルギー体に攻撃を仕掛けてくる。そこには、何の理由もなければ感情と言える感情もない。だから「災害」と呼ぶしかない。暗黒星雲極大期の悪影響を説明するのは難しい...

時々、過去の極大期に遭遇した時の記憶を持つ者がいる。大抵それは、「姿ははっきりしないが、何かとてつもなくやばいものが迫ってくる。それを直接止める術はない。運良く過ぎ去る

のを待つか、離れるか。」という感じか。

※ 「移動要塞」を隙間なくぴったり閉ざさなければならないのは、災害の影響が強い時だけだろう。

以上をまとめると、移動要塞に必要な条件は、

1. 移動速度と機動性
2. 都の居住区を守る障壁
3. 門と出入り区画に水の流れを利用した除塵の仕組み
4. 救出や離脱の為に主砲や部隊（使徒）基地。

4つの条件を満たした上で、未来千年間に来るすべての避難民が暮らすのに必要な数の移動要塞が建造される。

黙示録で「移動要塞のサンプル模型」を見せたのは、「このように災害対策をするから安心してのように」という、私たちこの世の人間達へのメッセージであろう。

## 5.1.まとめ

---

あの世では、エネルギー宇宙の塵から暗黒星雲を復活させてしまい、なんら未然の対策をせずに地獄の階層に集めるため、暗黒星雲極大期という災害が起こる。

しかも、あの世には腐敗した先住者がいて、彼らに知られると避難計画が妨げられるため、無事に出立できるまで計画は隠される必要がある。

避難計画のおおまかな流れはこうである。あの世では着々と避難準備が進んでいる。その間、この世は腐敗した先住者の注意を引きつけておく為、罔になってきた。準備が整うと、避難民とこの世を乗せた「移動要塞」は出立し、あの世を離れる。その際この世で、「大ユウフラテ川」になぞられる大きな川がある国か地域で未曾有の大地震が起こり、世界中を巻き込んだ戦争が妨げられる。そして千年間災害を避けて暮らした後、再びあの世に戻り、極大期の収束を見届け、罪人を裁いた後、新しい世界を建設していく。

私たちのエネルギー宇宙は、災害と人災、2つの問題を解決し、心豊かな世界を築いていかなければならない。

黙示録の意図は、いずれあの世で大規模な災害からの避難計画があるというメッセージを、人類に伝えることである。なので、人類史において事が起こる前に、早々と読み解かれる必要もなければ、避難計画が済んでから明るみに出ても構わない（いや、むしろほぼ全部済んだ後の方が無難）という性質のものだろう。ただ、黙示録の中で「契約」の文字が出てくる。これはやはり、契約が履行されたなら、人類に何らかの形で伝えられる必要があるということだ。

<了>



## 5.2.おわりに

---

著者より☆

これは、2012年5月に作成した『「ヨハネの黙示録」解釈～避難計画書～』（レポート風）を、資料集として残したものです。

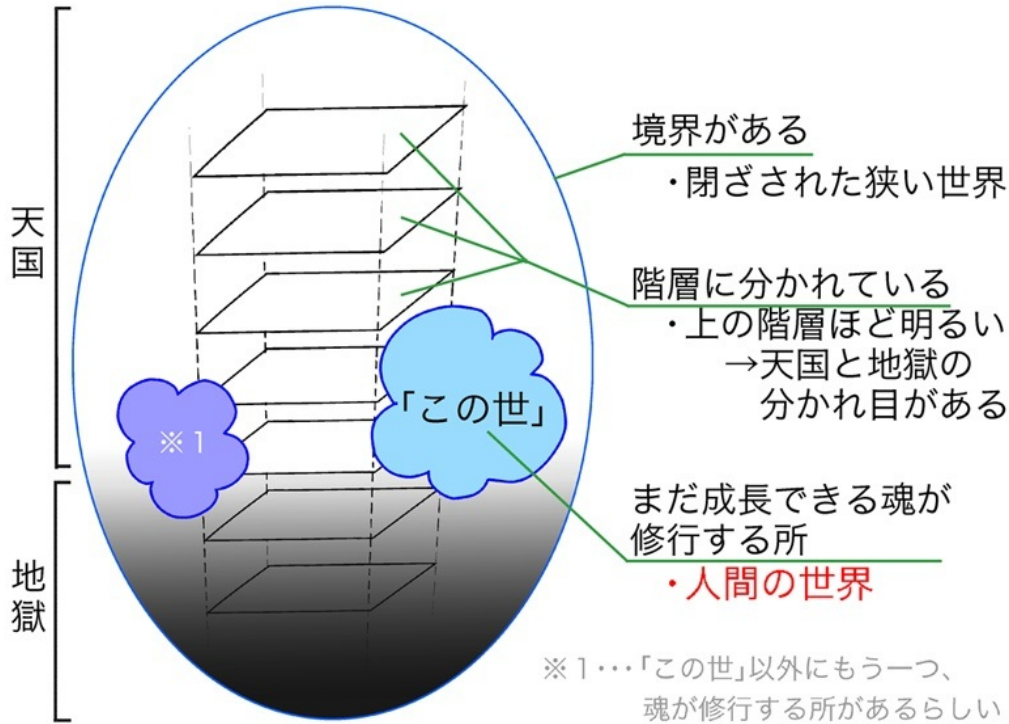
その後の新情報は、こちらのホームページでご確認ください。

→ 「魂」＝「エネルギー意識体」の世界 <http://secca.ninpou.jp/>

# あの世

閉ざされた世界。このエネルギー宇宙の、ほとんどの”エネルギー体”が収まっている所。暗黒星雲  
極大期の災害を避けるには、あまりにも狭い世界。

## <あの世>



## 赤い龍、龍

---

敵キャラ。映像で「敵」と分かるように、赤い色分けで悪そうな絵柄なのだろう。「全世界を惑わす年を経たヘビ」とも。非常にずる賢く、長生きな（あの世で「長生き」は少なくとも2億歳。腐敗した先住者。）印象を受ける。腐敗した者を悪仲間に取り込み運命共同体となり、「大粛正」を逃れる工作をしてきた。

## 移動要塞

---

避難所を兼ねた都。できたら要塞の全体を覆えると尚良い。災害対策が手遅れになれば、悪影響を避けるため、広い空間を移動しなければならない。それには「あの世」は狭いので、外の世界に出て、災害を避けて移動しながら暮らす必要がある。そのための都。

## 大肅正

---

天国では、数千年に一度、腐敗した者の殺処分を行う決まりになっている。千年ごとに大肅正を行うかどうかを考え直す。この機会に過去数千年間の腐敗を取り除かねばならないが、先住者が”肅正逃れ”の工作をしてきたことが分かってきている。

要するに、天国における警察行為にあたる。これさえ済めば、天国の住人は、その先数千年の間、誰にも疑われることのない、何にも脅かされることのない、天国を約束される。



エネルギー体の世界では、「暗黒星雲」などと呼ばれる、どうしようもない存在が発生することが分かっている。

暗黒星雲はエネルギー体の**集合体**で、周りのエネルギー体に攻撃を仕掛け、暗黒星雲化し、極大期を迎えた後、消滅していく。その極大期の影響たるや凄まじく、破壊的なダメージを世界に与えるという。そして、まだ解明されていないことが多い。

エネルギー宇宙では、太古から暗黒星雲が極大期を迎える周期がおおよそ分かっていたが、世界が発展し、手つかずの塵が減っていくにつれて発生しなくなっていた。今回の暗黒星雲は、世界が始まってから最初の1期目と2期目に極大期に至り、世界を破壊するはずだったもの。

その暗黒星雲が、ある特殊な事情からエネルギー0（ゼロ）の塵に還っていて、新人たちの塵が回収されたとき一緒に回収され、それぞれの魂として生成されている。つまり、私たちと共に、魂の成長のため、この世で人間として修行中である。私たちと同じ生まれで、同じ権利を持つ「魂」として、である。1期目は人類の歴史で言うところの「中世」の時代に来ていたのだろう。2期目は世界大戦頃から今の時代にかけて来ているのだろう。暗黒星雲はこの世に来るとカルトになる。悪意に満ち満ちた存在なので、地獄の範囲の階層に入る。そして、地獄の階層に集まっていくと、ある段階から極大期に至る。（尚、暗黒星雲に呑まれるかどうかは太古の昔は「運」だった。今は複雑な要素があり、必ずしもそうとは言えまい。）

「あの世」自体作った世界なので、本来災害は事故でないなら作らなければ起こらない。暗黒星雲極大期という災害は、暗黒星雲を復活させ、何ら未然の対策もせず地獄の階層に集めてしまうため起こってしまう。

おそらく今回のものが、私たちのエネルギー宇宙で、不意に発生する最後の暗黒星雲極大期であろう。

## 極大期

---

暗黒星雲極大期。極大期に入った暗黒星雲は、エネルギー放出を始め、他のエネルギー体を攻撃する。もともと暗黒星雲は意識体ではないので、意識しなくても起こる特殊なエネルギー現象だろう。災害と言うしかない。

魂。私たち人間の中の人。より成長した魂が、より大きなエネルギーを持つ。

## 先住者

---

自立型エネルギー意識体。天国でずっと支配層の住人。従来の多数派。意識体の段階まで自然発生した魂。新人たちとの確執が決定的になった。

## 新人

---

自立型エネルギー意識体。天国の住人と、魂の成長のためこの世で修行中の者がいる。未来の多数派。1万2千年程前(?)に出来た技術で、エネルギー宇宙から回収された塵から意識体に生成された。いくつかの事情から、先住者から迫害されてきたことが明らかに。

数千年に一度の大粛正の際、先住者の不正が発覚する。それまでも先住者と新人は利害が一致せず、たびたび小競り合いが起こってきたが、このときばかりは反乱が起こる。腐敗した先住者（赤い龍）が粛正を逃れるため、彼らの身代わりとして冤罪の新人達を殺処分させている、という不正。そうして起こった戦いを「殺処分・逆殺処分の戦い」と呼ぶことにする。反乱軍は全員討ち死にするが、引き替えに多くの先住者を殺す。その結果、新人の方が人数が多くなり支配層が交代する時期が早まる。それが反乱軍の狙いであった。その後は、災害対策も多少はできるようになるはずだった・・・。

ところが、先住者は「未来予知装置」の情報を使って未来変更を行った。それは最初、先住者にとって都合のいい未来だった。未来の反乱軍のメンバーの大半をこの世に来させ、その間に大粛正を終わらせてしおうという陰謀。ところが、この世で言うところの西暦2000年前後、やはり不正が発覚し、あの世で揉めることとなった。（天国の正規軍も今回やる気なくしたのかもしれない。もともと志願制であるし・・・）結果、今回の大粛正は回避され、次の千年紀に考え直すことになった。

「未来予知装置」を持ちながら、先住者は災害対策をしなかったようだ。彼らが反乱を恐れて行なった未来変更により、私達はあの世で災害対策をする機会さえ失ってしまった。対策が完全に手遅れなら、あの世を離れて災害を避ける選択肢しか残されていない・・・。

↑ 去年（2011年）一年間くらいインターネットで書いていた長い話を要約してみた。読みにくいは堪忍して欲しい。

著者は、反乱軍のメンバーの一人で、本来ならとっくに（魂が）戦死している筈の者なのだが・・・。未来が変えられてしまい、選択肢がなさそうなだけに啞然とするばかり。皆そうなのだろうか・・・

反乱の話は、死海文書の「戦いの書」に似てる？

## 獣

---

敵キャラ。エネルギー宇宙から回収された塵からエネルギー体を生成する技術で復活した暗黒星雲。もともと集合体になりたがる性質を持つ。1期目と2期目の暗黒星雲がいる。暗黒星雲は悪意に満ち満ちた存在で、天国に入れたい。1期目の暗黒星雲はもうほとんどが地獄に収まっているだろう。この世に来るとカルトの性質になる。

## カルト

---

悪人崇拜の組織や集団。日常的に「悪い事できた人」を褒め称える。洗脳やマインドコントロールを使うが、そのために変質者であり詐欺師になる。集団心理に陥ると活性化する。

オウム真理教のような悪人崇拜の新興宗教、自己啓発セミナー、中国共産党など。

カルト問題は、犯罪が発覚しなければ個人間の問題とされる。だが、本来カルトは人類共通の敵、少なくとも各国の社会問題。なのに、なぜか公（おおやけ）の場でカルト問題が扱われることは少ない。

カルト＝獣＝暗黒星雲は、あの世に戻ると彼ら自身が意識しなくても、「暗黒星雲極大期」という災害になってしまう。カルト関係者には、カルト集団や組織から足を洗い（縁を切り）、悔い改める最後のチャンスがこの世で与えられているからだろうか？



## 階層

---

あの世は階層に分かれている。より成長した魂がより上の階層に収まる。上の階層ほどエネルギー配分が多く明るい。下の階層ほどエネルギー配分が少なく暗くなっていく。よって、決められたわけではないが「天国」と「地獄」の分かれ目が存在する。

## 反乱軍のメンバー

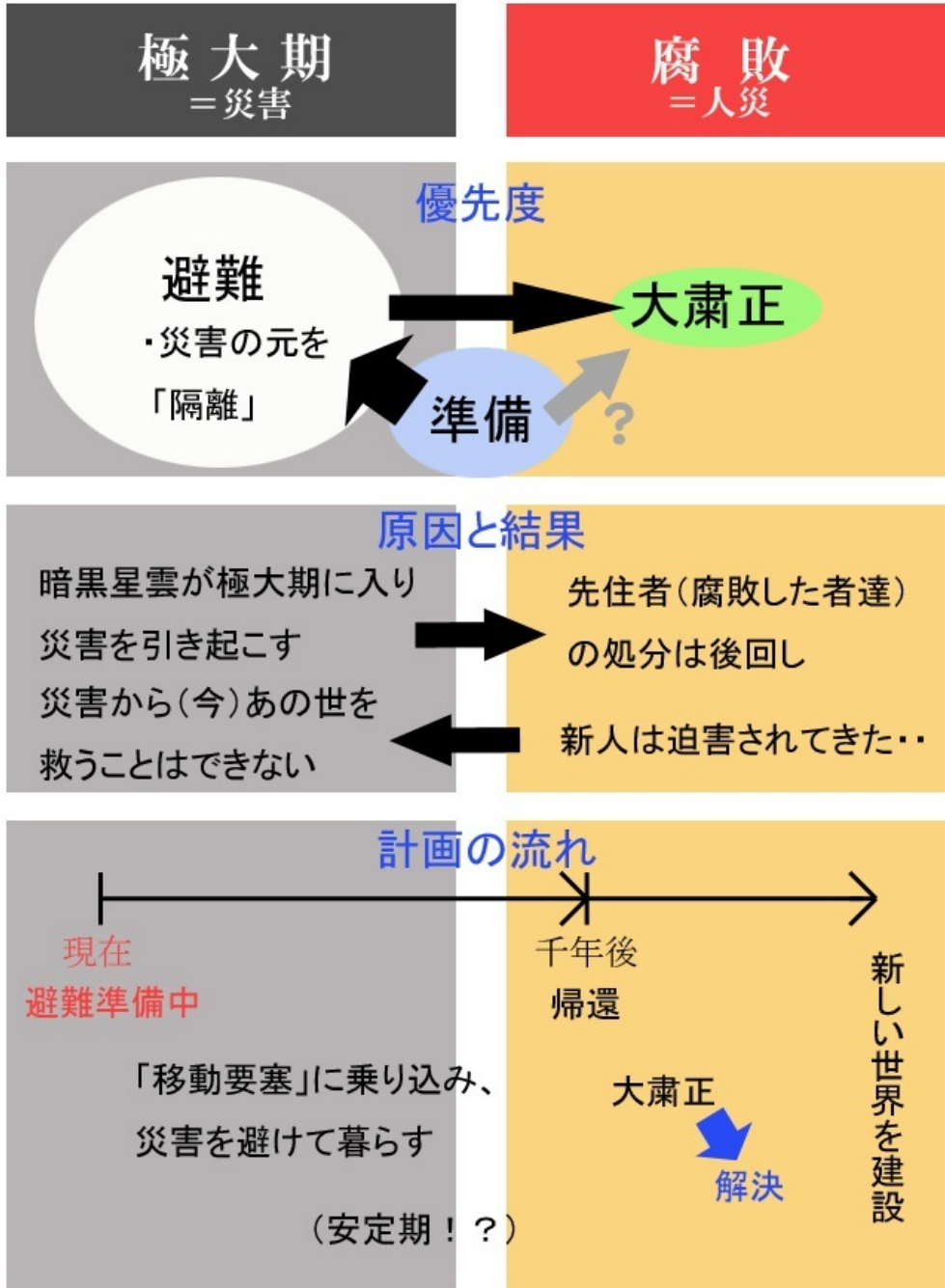
---

この世には、第二次世界大戦の時、多くが日本に来ていた。アメリカとの戦闘で勝っていた頃の日本兵、その中の人たち。敗戦後、彼らが存在したことを示す証拠の多くが抹消されている。例えば、兵士たちの写真の多くが日本から略取され焼却処分された。（←よって、妄想自由・・・！？）

あの世で先住者の横暴に対して反乱を起こしたメンバーは、新人たちの時代の到来を早めて皆戦死するはずだった。だが、『未来予知装置』で未来の反乱を知った先住者側が戦いを避け、本来戦いで死ぬはずだった者たちが、敵味方両方とも全員死なないこととなった。

著者Nも、反乱軍のメンバーの一人(°▽°)

## 「あの世」が抱える2つの問題



## 未来予知装置

---

あの世で数万年前に開発された。他者の運命に関わる未来を変更するならば、大義がなければならぬ。大義もなく一方的に利用されたなら、もう一方にも同じくらい利用する機会がなければならぬ。

## 過去を知る装置

---

「未来予知装置」が悪用されたなら、「過去を知る装置」もなければ問題解決できなくなってしまう。

”エネルギー体”の世界。「自立型エネルギー意識体」が主導する。あの世の外の世界のこと。

<エネルギー宇宙>

